第409回(584) <読書会>例会資料
『ジャン・クリストフ』第9巻「燃ゆる茨」

2024年9月28日(土)午後2時−4時
発表 四宮こころ
朗読 中田裕子、松田有美

みすず書房174頁〜197頁

彼の魂は内部の魔人らに引き裂かれ引きずりまわされていた。内部へ押し込められた**情欲**がその住家の壁へもの狂おしくぶつかりつづけていた。それに劣らずまたその**情欲への嘔吐感**も激しかった。

オリヴィエへの追憶、彼が死んだための**クリストフの絶望**、満たされないままに彼の心に迫る**音楽制作欲**、虚無の深淵に対して反抗的に憤って後脚で立ち上がる**誇り**。それらの全ての妖怪どもが彼のうちに居た。思想も愛も意志力も全てが消滅していた。

音楽を作り出すこと！ただそれだけが**救い**であった。生の残骸を潮にゆだねること！芸術の夢の中を泳ぐことによって**自己を救うこと！創造すること！**それを彼は意思した。しかしもはや彼は創造することができなかった。

彼が強くて健全だったときには、自分の創作力が溢れる過ぎることに悩まされこそすれ、それが枯渇するのを心配することなどはなかった。気の向くままに作曲した。

オリヴィエはたびたびクリストフに警告した一。

「用心したまえ！**君は自分の力に信頼をもちすぎてるよ。**今日は水があり余っていても明日には涸れるかもしれない。藝術家は自分の天才を巧みに自分に引きつけておかなければならない。藝術家は行き当たりばったりに自分の天才力を濫費させてはならない。**君の力のために運河を設けたまえ。**仕事の習慣へ、日々の仕事の衛生法とも言うべきもの、一定した仕事の時間へ君自身を強制したまえ。魂が着ているこの**鉄の鎧**が、魂をその崩壊から防ぐのだ」

＊朗読①177頁上段16行目〜177頁下段

最も困難な試練。生きているもののうちでクリストフの存在に気づかいを持っているらしい唯一の者。それはサン＝ベルナール種の一匹の老犬だった。クリストフはこの懇願している、その両眼の持ち主に助力を与えること以外に何も懸念はしなかった。そこに**歎願している魂**を感じた、**囚われになっている魂**を。

彼はとつぜん、**人間の犠牲にされているいろいろなもの**に気がついた。人間が他のいきものどもを屠殺しながらそれらのものの征服者である戦闘場裡を見た。そして彼の心は**憐れみ**と、**驚愕**とに充たされた。生きることは、**苦しみを蒙る**こと、**苦しみを与える残酷**さの無限の総量にもとづいているのをクリストフは誰にも劣らずよく心得ていた。人間は、受容と残酷とを減らすように絶えまなく努めなければならない。これは第一の義務である。

＊朗読②179頁上段最後2行〜180頁4行目

悲しことに、人間によってなされる屠殺は、**宇宙全体**の中で行なわれている殺戮に比べればいかにも僅かなものである！動物どうしが食い殺し合っている。おとなしい植物、無言の樹々もたがいのあいだでは猛獣どうしのような関係である。近くの森の中では恐るべき戦いが行われている。しかもそんな戦いは**静寂**に包まれている！
おお、自然の平和、それは、苦悩に充ちていて苛烈な≪生≫の顔を包み隠している悲劇の仮面である！

彼は死ぬこと欲しながらも、生きるためにできる限りのことをしているのだった。そうだ自分があの子を探し出して、取り戻して、育てて、愛して、父オリヴィエの親代わりを自分がしなければならない。その息子において**オリヴィエを復活**させて生かし続けなければならない。

人生の日蝕の時期に合って、自分が**先祖**から授かっている生まれつきの力によって支えられている人々はさいわいだ！倒れかかっている息子のからだを、**父**の、**祖父**の健脚が支えて前進させる。**強壮な先祖たちの推進力**が、**挫折している魂**を荷って行くありさまは、死んでいる騎士をその馬が乗せていくときみたいである。

復活祭の週であった。非常に遠くからどよめいて聞こえる鐘の音は、霧につつまれて見えない村から来た。鐘の声が彼に語っているようであった。「僕たちと一緒にきたまえ！ここまで来れば平穏が在るよ。ここでは悩みはもうないよ。来たまえ。憩いにつきたまえ。そうすれば君はもう眼ざめなくてもいいのだよ…」
「僕が求めているのは平穏ではなく、生(いのち)なのだ」

彼は敗北者の蒼ざめている顔を、眼にかぶさっている厚ぼったい瞼を、同情をもって見た。
「あなたは何を見つめて居られるのです？」
「待っているのです」
「何をです？」
「≪**復活**≫を」

この静かさがクリストフを不安にした。急に遠方から風の吹く音が聞こえて来、それが近づいて来た。**先駆である一陣の突風が、森の奥から立上がって来た。それは疾走する一匹の馬のように樹々の梢を通り、梢は波立った。竜巻に乗って通る、あのミケランジェロの描いた「神」のようであった。それはクリストフの頭上を通った。森と、そしてクリストフの心がおののき奮えた。これは告知する者であった・・・**

再び静かさが来た。クリストフは或る神聖な恐怖にとらえられて、震える両足を急がせて家に帰った。自然は死んでいるかのようだった。幾多の森は悲哀に押しつけらながら眠っていた。岩を噛む瀧津瀬の、葬いの音楽みたいな音だけが、大地の死を告げる弔鐘(ちょうしょう)のように鳴っていた。クリストフは発熱して寝床についた。
＊朗読　187 頁下段 5 行目～188 頁上段 1 行目

＊朗読③　188 頁上段 2 行目～189 頁下段 16 行目

クリストフは泉のつぶやきみたいに、自分のうちに再び湧いてきた生の歌を聴いた。昨日は葬られているように見えたその同じ景色が復活している。愛がクリストフの心の中に戻って来たと同時に生命がこの風景の中へ戻ってきている。恩寵に触れられた魂の奇蹟！

＊☆朗読④　190 頁上段 10 行目～190 頁下段 19 行目

※**彼のたたかいは萬人のためであり、萬人のたたかいが彼のためのものだった。萬人が彼の苦楽を分け持ってくれていた。彼は萬人の光栄に参加していた。**この魂は光を歌った。そして生を、そして死を。勝つ人々のために、敗北している自分自身のために歌った。彼の魂が歌った。彼の魂はもはや歌でしかなかった。

＊☆朗読⑤　191 頁下段 1 行目～191 頁下段最終

※**彼は自分の隣人を、己を愛するがごとく愛し、彼はその隣人であった。**

「お前は一人ぼっちではない。お前はお前だけに属しているのではない。
お前は私の幾多の声の中の一つだ。私の幾多の腕の一つだ。」
「たといお前が負けても、お前は決して敗北していない軍政に加わっている。
　そしてお前は、死んでいても勝っている、そういう、勝利者になるがいい」
「私もまた悩んでいるということがお前には信じられないのだろうか？」
「神もまた戦っている。按じてお前の義務を果たせよ。 その他のことは運命の≪神々」に任せておくだけでいい。」
「力のある人のために歌え」
「けがれた心を抜き取れ。その代わりに私の心を取れ」
「これからもお前から去ることがあるだろう。このことを心に刻んでいるがいい。
　もはやお前が私から離れ去らないかどうかはお前しだいのことだ」
「他の人々の生命を点火せよ」
「どこか他のところに生命が生きている。その生に向かってお前の門戸を開け」
「お前自身の外に出よ。他に宿りはかずかず在る」

彼がそれまで聴いたり作ったりした**音楽の全部を忘れてしまうこと**からやり始めなければならなかった。習い覚えたすっかりの形式主義と博習的技法を**一掃しなければならず、投げ捨てる**ことからやり始めなければならなかった。

以前に彼が、自分の生と芸術へ到達していると思い込んだときに、**彼は既に彼の考えに先立って存在していた一つの音楽言語によって自己表現をしていたのだった。**もはやどんな既成の道路も存在しないのだった。彼の感情が新し

い道を開いて作らなければならなかった。理智は後から従いて来なければならない。今やクリストフの音楽の役割は、もはや情熱の描写に在るものではなかった。情熱と音楽とが合体して、音楽が情熱の内在的法則と結婚しようとしなければならなかった。

藝術の名に値する唯一の、最も高い芸術は、一時的な支配力をもつ諸法則を超越している。それは無限界の中を走り進む一つの彗星である。この力が実用的な領域で有用なこともあるし無用なこともあり、危険なものであることさえあるが、とにかくそれは力であり火である。それは天から生まれた閃光である。それゆえにこそそれは神聖であり、それゆえにこそそれは**善い感化を及ぼす。太陽は道徳的でもなく背徳的でもない。太陽は≪実在しているそのもの≫である。それは夜に打ち勝つ。藝術の在り方もまたそんなふうである。**

彼が思いがけもしていなかったさまざまの未知の力が藝術から立ち現れて来るのを見て驚かされた。彼自身の情熱や、悲しみや、**意識されている魂とは全く別な一つの珍しい魂。これまで愛したり悩んだりしたすべてのものに対して、彼の生活全体に対して、無関心な一つの魂、**よろこばしげで気まぐれで、荒っぽく自由で、不可解な魂が立ち現れてきた！

どんな天才でも身に覚えのある、あの精神の無我状態に彼はつかまっていたのである。その状態の中ではたらく意志は、いわゆる意志と呼ばれているものから独立しており、それはゲーテが**≪デモン的（魔人的）なもの≫**と呼んだところの「言語を超越している、世界と人生の謎」であり、ゲーテ自身はこのものに対して常に心を武装していながらも、しかしこのものの意志にゲーテは順應していた。クリストフ書いた、書いた。生の廃墟の上に、創造の塊が君臨していた。
朗読⑥　194 頁上段最後の行～195 頁上段 7 行目
※自分の誇りの空虚さを、人間の傲慢の空虚さを、彼は、諸世界を動かしている≪力≫の、おそるべき拳の下で理解した。精神をめざましていなければならない。**もし精神が惰眠に落ちてしまうと≪力≫がわれわれに襲いかかって、われわれを、測り知れない奈落の中へ連れて行く。**創造する藝術家こそ誰にもまして、自分がこの神に依存していることを感じる。

火がやがて復活するだろうことを彼は知っていた。もしも彼のうちにでないとしても、他の人のうちに復活するだろう。その火がどこに生きるにせよ、彼は同じだけの愛をもってそれを愛するだろうし、それは常に同一の火であろう。

自分がたちまちに地へ落ちることを、更に何度も何度も落ちることを、その魂は知っていた。しかしまたその魂は知っていた。倦むことなく空の火の中へ繰り返し繰り返し舞い上がって行き、その魂の歌をさえずり、そしてその歌は、地上に住んでいる人々に天の光について語ることを。

【感じたことのまとめ】

●クリストフ≪力≫が本当は何のために必要であるか、を悟ったのではないだろうか。

絶望も悲嘆も戦いも、無数の人々のそれに通じていること。彼の心を満たす歓びもまた、すべての人々と共通であることを感じた。 ≪力≫は自分の内部や自己表現のためのものではない。他の者のために犠牲を払う愛であり、自分の内部ばかりでなく「他の人々のためにも生命の焔をかき立て、燃え上がらせるもの」である。これこそが、クリストフが求めていた≪生≫の藝術、真実であることを見つけたのではないだろうか。

●クリストフは漸く、オリヴィエを理解し、その魂との融合に至ったのではないだろうか。

戦いと復活を経て、オリヴィエの憐れみ、オリヴィエの自由な魂、オリヴィエの一切の国境を持たない自由な精神を真に理解できたのではないだろうか。

全てはオリヴィエがクリストフに警告したこの言葉から始まっている。「君は自分の力に信頼をもちすぎてるよ。君の力のために運河を設けたまえ。」 クリストフは運河が何であるかを理解したのだ。ゲーテがデモン的なものに武装し順應したように。老ハイドンが毎朝ペンを取る前にひざまずいて祈ったように。モーツァルトが言った「萬策尽き果てるまでは何かの努力をすることを欲する人々」の本当の意味のように。

●まるでベートーヴェンのソナタ形式のような構成にも魅了される。

神との対立から始まった。対立は自分の内部にもあった。クリストフの心を引き裂いていた情欲への嫌悪、オリヴィエへの追憶と絶望、自己表現のための創造との対立。戦いに尽き果て、犠牲者そして敗北者となったクリストフは、はじめて宇宙全体の静寂の中で平然と行われている苛烈な殺戮を知る。戦っているのは自分だけではない。戦いは自然の平和を成し、生の一部であることを知る。父と祖父から授かった生まれつきの力を得て前に進む。予告する者が現れる。

神がとうとう帰ってくる。神との対話が始まる。神も戦っている。芸術家は、隣人を愛するために、人々の生命を点火するために創造するのだと理解する。遂にオリヴィエの精神と融合し、真の藝術家としての昇華に至る。

―クリストフの≪復活≫を描く、ロラン渾身の交響曲がここに在るのではないかと考える。

●ロランが影響を受けたあらゆる人物の要素がつまっていることにも驚かされる。

本文に挙げられたモーツァルト、ゲーテ、ハイドン。クリストフが音楽の形式として自己実現の形式を脱ぎ捨て、情熱と音楽との合体を得ようとしたベートーヴェン。そしてロランに大きな影響を与えたスピノザの閃光、ロランの精神の全てを以って、クリストフを復活させたと感じた。